

## 「アブラハムの信仰」（ローマ四・一〜一二）

### 1 二人の証人

今日の聖書箇所には、アブラハムとダビデという、旧約聖書を代表する二人の人物、名前が出て来ます。

アブラハムについては、旧約聖書、創世記、とくに一二〜二五章にかけて詳しく伝えられています。

このアブラハムの子孫がイスラエルということになります。アブラハムが故郷メソポタミヤ（現在のイラク北西部）を離れ、カナンの地（現在のパレスチナ）にやってきたことから、この地でのイスラエルの歴史は始まりました。紀元前二千年ぐらいのことです。パウロの時代のユダヤ人も、今のユダヤ人もアブラハムを父と呼んでいます。ユダヤ人は父祖アブラハムを、そして自分たちがその子らであることを最大の誇りとしてきたのです。

もう一人、ダビデ。これは歴史がぐっと下がって、紀元前千年ごろです。四〇年にわたってイスラエルを治めた王です。王としては二人目ですが、五百年ほど続いた王国時代、史上もっとも優れた王でした。彼の時代に、イスラエルは最大の繁栄の時を迎えます。ダビデのことは、聖書では、サムエル記、とくに下（げ）に詳しく語られています。

今日の箇所（七〜八節）に旧約の詩編が引いてあります。ダビデは優れた詩人でもありました。詩編の半分近くがダビデに帰されます。すべてに秀でた存在として伝えられています。

後代のユダヤ人は、やがて到来するメシア（ギリシア語でキリストという。救世主のこと）の具体的イメージをこのダビデに求めたのです。あのような王がもう一度現れる、そしてその優れた統治によって、われわれを異教徒の支配から解放し、国の内部では、神の主権の下、正義を行い、弱い人たちを守る。メシアはダビデの家系から出る。それがユダヤ人の民族的確信でした。

さてこの二人をパウロがここで引き合いに出した目的は、はっきりしています。彼らを「証人」とするためです。〈人は信仰によって義とされる〉、パウロがここまで書いてきた、このメッセージ、この真実を証ししてもらうためです。証人としてこの二人に勝る人はいません。

〈信仰によって義とされる〉、これは、私も先週少し学んだところです。今日の箇所に入る前に、確認しておきたいので、関係のあるところを、もう一度取り上げておきます。

わたしたちは、人が義とされるのは律法の行いによるのではなく、信仰によることを考えるからです。（三・二八）。

〈律法の行いによってではなく、信仰によって義とされる〉、きわめて重要な聖書の言葉です。実際パウロは、他の手紙でも、くり返しこれを語っています。キリスト教信仰の中心のメッセージです。

これらの言葉には説明しなければならぬことが、いくつかあります。まず〈義〉です。いろいろの意味がありますが、差し当たり〈正しき〉〈正しい〉と言い換えておいていいと思います。

次に、〈人が義とされる〉の中の〈される〉というところです。これは少し強い訳し方をすれば、正しいと〈認められる〉、正しいと〈見なされる〉、正しいと〈宣告される〉となります。商業用語としては、勘定される、参入される、です。〈義とされる〉には、法廷の用語として、無罪宣告を受けるという意味もあります。だから義とされるのかと言えば、いうまでもなく、ここでは、他人からでも、自分からでもなく、まさに神からです。人が現実に正しいか、正しくなっているか、ではありません。正しいと認められるのです。この神は「不信心な者を義とされる」(五節) 神なのです。

もう一つ重要なのは、〈律法の行い〉による義が否定された上で、〈信仰〉による義が主張されていることです。

ユダヤ人は、一般に、律法を行うことによって神から義と認められる、と考えていました。律法とは、この場合、例えば、十戒(出エジプト二〇章)のことです。あそこには、偶像をつくってはならないとか、殺してはならないとか、十のおもな戒めがあります。それを守っていれば、神から義人と認めていただけるというわけです。それがユダヤ人の考え方でした。

しかし、どうでしょうか。パウロは少し後で(六章あたりから)その問題を取り上げるのですが、例えば、守っている、守れているということ、かえって、そこに神に対して自分を誇るといふようなことが、その人はそう思わなくても、生じたりしないでしょうか。あるいは他人(ひと)に対して、とくに守れていない人に対して蔑(さげす)むというようなことが、密かにであれ、起こって来ないでしょうか。人間である以上、全くないと言いつける人はいない。そうすると、そこには、せつかく神の律法を行っていないながら、かえって罪が現れ、みにくい自分の姿があらわになり、救われて安心どころではなくなることが起こるのです。「律法によっては、罪の自覚しかなじない」(三・二〇)という問題です。律法を守ろうとすることから救いに至ることはないのです。

## 2 信頼としての信仰

これに対して〈信仰によって〉というのは、まずはそうした律法の行いに頼る生き方から、転換することです。律法の道は行き止まりだ、救いに通じていないとはつきり知ることです。

その上で、〈信仰によって〉を、もっと積極的にとらえれば、〈信仰〉を、信頼という言葉で理解してもいいのです。

例えば、〈信〉という漢字、にんべんに言（ことば）です。人の言葉です。その言葉だけで信用する、つまり信頼です。信仰によってとは、神へのまったき信頼によってということですよ。

そしてパウロは、信仰によって義とされた最初の人を、じつにアブラハムに見いだしたのでした。

では、肉によるわたしたちの先祖アブラハムは、何を得たと言うべきでしょうか。

もし、彼が行いによって義とされたのであれば、誇ってもよいが、神の前ではそれはできません。聖書には、何と書いてありますか。「アブラハムは神を信じた。それが、彼の義と認められた」とあります（一〜三節）。

ここを読む上で私も少し注意しておきたいのは、アブラハムについて何かをいう場合、律法にからめて何か語られることはないことです。それもそのはず、アブラハムの時には、〈律法〉はまだなかったからです。律法は、アブラハムから四〇〇年以上もたって（ガラ三・一七）、モーセの時にできたものです。ですから、この箇所では〈律法の行い〉という言い方はできません。たんに〈行い〉です。しかし〈行い〉であれ、何であれ、アブラハムは〈信仰によって〉義と認められた。この一事は変わらないのです。

パウロがここで聖書の言葉として引いているのは、創世記一五章六節です。「アブラハムは神を信じた。それが、彼の義と認められた」。揺るぐことのない聖書の言葉です。

この言葉が出てくる箇所、その前後のアブラハムのことを少し申し上げると、こうです。

アブラハムとその妻サラ、彼らのあいだには子供がありませんでした。また子供ができる年齢もとくに過ぎていました。彼らは、家を継がせる他人、家で働いていた奴隷エリエゼルですが、それも決めていたのです。ところが、神が現れて、アブラハムとサラのあいだに子供が生まれる、神の約束を継ぐ者となると約束します。そして外へと連れだし、いまお前たちが見ている星の数が数えられないように、その子供から、アブラハムよ、お前の子孫が増えて行くと語るので。そしてその時ここに引かれた聖書の言葉が語られるのです。「アブラハムは神を信じた。それが、彼の義と認められた」。

こうした、アブラハムが〈信仰によって義と認められた〉ことを暗示する言葉のあることを、ユダヤ人たちも、知らないわけではありませんでした。ですからこの箇所も彼らの間でさまざまに解釈されていたようです。その一つとして、ユダヤ人たちはこのアブラハムの信仰も、一つの立派な行いだと考えたようです。その〈信仰という行い〉によってアブラハムは義と認められたのだと。

しかし信仰は行いではありません。信仰とは神への信頼です。信頼しているがゆえに、神の約束の言葉をそのまま受け入れるのです。それが信仰です。そのような信仰によって、そのような信仰のみによってアブラハムは義と認められたのです。この聖

書の言葉はユダヤ人のすべての理屈を粉碎したと言ってよいでしょう。

### 3 割礼のある者もない者も

しかしそれでもユダヤ人は、食いが下がったようです。パウロは、アブラハムの〈信仰〉だけが強調して一面的だ、納得できない、ということだったのでしょいか。それが割礼の理解の問題です。

では、この幸いは、割礼を受けた者だけに与えられるのですか。それとも、割礼のない者にも及びますか。わたしたちは言います。「アブラハムの信仰が義と認められた」のです。どのようにしてそう認められたのでしょうか。割礼を受けてからですか。それとも、割礼を受ける前ですか。割礼を受けてからではなく。割礼を受ける前のことです。アブラハムは、割礼を受ける前に信仰によって義とされた証しとして、割礼のしるしを受けたのです。こうして彼は、割礼のないままに信じるすべての人の父となり、彼らも義と認められました（九〇―一〇一節）。

ここの最初の「では・・・」以下は、想定されるユダヤ人の側からの反問と考えてもいいと思います。そして「わたしたちは」というのは、パウロに代表されるユダヤ人キリスト者、キリスト者のそれに対する答えということになります。

実際、ユダヤ人から見れば、アブラハムが義人であるのは割礼に基づくと考えていたからです。割礼（生後八日目に男児の包皮を切り取る）は、イスラエルを選ばれた民として他の国民（くにたみ）から区別するものです。最初に割礼を受けたのがアブラハムなのです（創世記一七章）。ですから神の救いは割礼に拘束される。割礼ある者のみに救いはある、無割礼の者には、義も、救いもない、これがユダヤ人の考え方であったのです。

聖書によれば、アブラハムが割礼を受けたのは九九歳のときです。アブラハムの信仰が義とされたのは、そのずっと前のことでした。パウロはそのような歴史的事実を指摘します。信仰が先だ、割礼はその後だ、と。それはユダヤ人も否定できない事実でした。

アブラハムの救いを、割礼を条件としたものとして理解することはできません。彼は割礼のゆえではなく、信仰のゆえに義とされたのです。重要なのは信仰です。パウロにとって割礼はいまや神の契約の印（創世記一七・一一）ではなく、信仰によって義とされたことの印なのです。

信仰こそ、すべての人間に開かれた救いの可能性です。割礼のあるなしを言い出したなら、律法を守る守らない、ということを出したら、行い、云々ということを出し出したら、その可能性は失われます。神に近づくのに、人間の側の条件は一つありません。信じることで、それはだれにもできます。神を信頼して歩むこと、それはだれにでもできます。信仰は、すべての人に開かれています。信じることはだれにもできるのです。

（二〇二三年二月一九日）